

賢首大師法藏と法門寺

鎌 田 茂 雄

一 問題の所在

華嚴宗の伝承では第三祖とされる法藏の伝記については、すでに諸学者^①によって研究がすすめられているが、なお不明な点も多い。本致では主として法門寺との関連についての記事を検討し、法藏像の一側面を明らかにしたいと思う。

法門寺とは陝西省扶風県に位置する寺院であるが、一九八七年四月、新たに発見された地下宮殿の中から、釈迦の指骨舍利四枚と、唐代の珍しい文物が数多く出土した。これらの文物は新たに造られた法門寺紀念館に収蔵された。一九八八年十一月九日、内外の人士を集めて盛大な仏舎利供養が行われ、地下宮殿の宝物が正式に公開された。私もこの法会に参加し、つづさに法門寺出土の仏舎利や宝物を直接に見聞することができた。

北京大学教授季羨林氏は法門寺の如来指骨舍利と仏教文物の発見は、陝西省における半坡遺跡と秦俑の発見につぐ、第

三回目の重要な発見であり、この発見が歴史、文化、宗教、政治、経済、科学技術と東西文化交流などの研究に大きく貢献するものであると言っている^②。

法藏の事跡のなかで法門寺に関連する資料の一つに張彥が唐の大暦十三年（七七八）に撰した『大唐聖朝無憂王寺大聖真身宝塔碑銘并序』（『真身宝塔碑銘并序』）があるが、これによって法藏の舍利奉迎の事実が明らかになり、新羅の崔致遠の『法藏和尚伝』（『唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚伝』）の記事の信憑性を明らかにすることができるとともに、法藏像を訂正する必要があると思う。

二 唐代における法門寺仏舎利の奉迎

法門寺の仏舎利は唐代に前後七回にわたって公開されたり、宮中に奉迎されたりしている。法門寺の歴史や仏舎利奉迎については陝西省社会科学院歴史研究所の陳景富氏の論文^③があるので、それによって簡単に述べておきたい。

太宗の貞觀五年（六三二）、太宗の勅命によって舍利塔を開き、数千人の道俗が舍利を見たという。『集神州三宝感通錄』卷上の「周岐州岐山南塔縁」第五に資料がある。この時は舍利の公開だけで奉迎はされていない。

第一回は顯慶四年（六五九）から竜朔二年（六六二）二月十五日の間に舍利の奉迎が行われた。このとき供奉したのは内道場の僧、智琮と弘静であり、法門寺より長安を経て、洛陽の宮中に舍利を奉迎した。則天皇后は絹一千疋を喜捨し、舍利のために金棺、銀槨を造ったという。『集神州三宝感通錄』卷上および「真身宝塔碑銘并序」にこの記事がみえる。

第二回は武周朝の長安四年（七〇四）十月、法藏などが法門寺に行き、舍利を洛陽に迎えて供養した。神龍二年（七〇六）、中宗の命によって舍利を法門寺に返還した。この記事は『法藏和尚伝』と「真身宝塔碑銘并序」にみえる。

第三回は肅宗の上元元年（七六〇）五月、法澄などが仏骨を内道場に奉迎した。記事は「真身宝塔碑銘并序」にみえる。

第四回は徳宗の貞元六年（七九〇）二月、仏骨を宮中に迎えて供養した。『旧唐書』卷十三、徳宗下、および『資治通鑑』卷二百三十三、唐紀四十九、徳宗貞元五年条に記事がある。

第五回は唐の憲宗の元和十四年（八一九）正月、仏骨を宮中に奉迎した。このとき刑部侍郎の韓愈が上疏して仏骨奉迎の弊害を上奏したのは有名な話である。『資治通鑑』卷二百四

十、唐紀五十六、憲宗元和十四年条などを見よ。なお「仏祖統紀」卷四十一を参照せよ。

第六回は懿宗の咸通十四年（八七三）三月、内道場に奉迎されて供養された。この時の仏骨奉迎が史上最大の盛儀であった。『旧唐書』卷十九上、本紀第十九上、懿宗条および「資治通鑑」卷二百五十二では「京城より寺に至る三百里の間、道路の車馬、晝夜絶えず」と記し、さらに「儀衛の盛んなること、郊祀を過ぎ、元和の時、遠く及ばざるなり」と述べ、その盛儀を記録している。

以上述べたことによって明らかのように、仏骨の宮中への奉迎は六回行われたことが明らかである。この六回のうち第二回と第三回の奉迎に則天武后が関係しているが、とくに第三回の奉迎の時、法藏が活躍したことが注目されなければならない。

三 法門寺における煉指供養

法藏の舍利奉迎について述べる前に、法藏の十六歳のときの煉指供養について述べ、法藏は若い頃に、すでに法門寺と密接な関係があったことを検討しておきたい。

煉指についての記述が最初に見えるのは、七一三年に閻朝隠が撰した「碑文」（『大唐大薦福寺故大徳康蔵法師之碑』）のなかである。「碑文」は簡潔に、

年甫めて十六、一指を阿育王舍利塔の前に煉し、以て供養を伸ぶ。（大正五十・二八〇中）

と述べているだけである。つぎに九〇四年撰述の『法藏和尚伝』では、

藏、年十六、一指を阿育王舍利塔の前に煉し、以て法供を申ぶ。

（大正五十・二八三中）

と第七科修身善巧心の条の冒頭に『碑文』をそのまま継承して述べている。『碑文』および『法藏和尚伝』で述べているこの阿育王舍利塔が法門寺の舍利塔を指すか否か問題であるところであるが、『法藏和尚伝』の第八科の長安四年（七〇四）の舍利奉迎の条下に、

藏、以らく、昔、嘗て指を鍊し、今、更に肝を嚙やぶると。（大正五十・二八四上）

とあることから、法藏の行った阿育王舍利塔は法門寺の舍利塔であったことがわかる。『法藏和尚伝』がこの資料をどこから採用したかは不明であるが、法藏自身がこのように言ったとすれば、煉指し供養したところも法門寺舍利塔の前であったといえよう。

この記事は後代の史書である『釈門正統』巻八の「賢首相渉載記」（『統藏経』一三〇、九一一）や、『仏祖統紀』巻二十九の法藏伝のなかにも述べられている。ただし『仏祖統紀』では、

藏年十六、四明の阿育王舍利塔に詣り、一指を鍊す。（大正四十・九・二九三上）

とし、『釈門正統』では「明之育王舍利塔」としている。この二書では四明の阿育王舍利塔に法藏が行ったことになっているが、これは誤りである。四明とは浙江省寧波府の別名で、境域内に四明山があるためこのように呼ばれたので、四明の舍利塔とは、浙江省鄞県の鄞山阿育王寺の舍利塔を指すのである。

『仏祖統紀』がこのような誤ちを犯したのは浙江省の阿育王寺の舍利塔が有名であったからであらう。あるいは則天武后の長安年間に三階教の化度寺の無尽藏院を檢校し、大薦福寺の大徳となった法藏（つぎ）が蘇州呉県の出身であったために、華嚴の法藏と混同したためかも知れない。『全唐文』の撰者が華嚴の法藏と三階教の法藏とを混同していたことは明らかで、たとえば『全唐文』巻九百十四において法藏の「大乘起信論疏序」「修華嚴奥旨妄尽還源觀序」「華嚴經指帰序」「心経略疏序」をにかけている前に簡単な伝記をだしている。

法藏字賢首、俗姓諸葛氏、蘇州呉県人、一云姓康氏、康居人、至少出家、如意元年、武后制於東都大福先寺檢校無尽藏、長安四年、又制於化度寺檢校無尽藏、後延為薦福寺大徳、開元二年卒七十八、

この伝記をみると、華嚴の法藏の伝記と三階教の法藏との

伝を混同させて書いていることが明らかである。没年もまた三階教の法蔵の没年を記している。二人の法蔵があまりに生存年代が一致していたためにこのような混乱がおこったと思われる。

煉指の事件をあげているのもとも後代の資料は『法界宗五祖略記』であるが、ここでは、

十六歳の時、一指を岐州法門寺舍利塔前において煉し、法供養を作し、仏乗を悟るを誓う。〔統藏〕一三四、五四五下〕

と述べて、『法蔵和尚伝』の内容の解説から岐州法門寺舍利塔と断定している。

以上述べた『碑文』と『法蔵和尚伝』の記事から、法蔵が十六歳のとき、岐州法門寺の舍利塔の前で煉指供養したことは事実と考えられる。法蔵が何故、煉指供養したかは明らかでないが、仏道に生きる決意の表明とみなすことができよう。在俗の身で十六歳のとき煉指することは強烈な意志なくしてできることではない。しかも長安からかなり離れた法門寺舍利塔前で行ったことは何のためであらうか。

煉指といえは『弘賛法華伝』巻五〔統高僧伝〕巻二十七に伝ありに収録された周益州大乘寺僧崖伝を思い浮べる。僧崖は指を焚いて経を弘め、さらに焼身供養したのであったが、法蔵の場合は仏舍利の前で決意を表明したのにとどまったのである。ただ煉指とか焼身は『法華経』の「薬王菩薩品」の

信仰と密接な関係があり、若き法蔵も『法華経』を誦誦していたのではないか。だからこそ『華嚴五教章』の建立乗への分相門で一乗・三乗の差別を論ずるとき、見事に『法華経』を数多く引用し利用することができたのである。法蔵の華嚴教学の形成に及ぼした『法華経』の影響は改めて考究すべき問題である。

三法門寺仏舍利奉迎

法蔵が法門寺より仏舍利を奉迎した事実を記す従来の華嚴関係の資料は、『法蔵和尚伝』および『法界宗五祖略記』のみであり、後者の資料は『法蔵和尚伝』によって記述したのであり、古い資料としては『法蔵和尚伝』ただ一つということになる。それはつぎのように述べられている。

長安四年（七〇四）の冬の杪、内道場に於て、因みに對して言を歇るに、岐州の舍利に及ぶ。是れ阿育王の靈跡なり。即ち『魏冊』に載する所の扶風の塔是なり。則天、特に鳳閣侍郎、博陵の崔玄暉に命じて蔵と偕に法門寺に往きて之を迎えしむ。時に蔵、大崇福寺の主為り。遂に応大徳、綱律師等十人と俱に、塔所に至り、行道すること七晝夜、然して後に之を啓くに、神輝煜燭たり。（大正五十・二八三下～四上）

つづいて法蔵の感懐、舍利の状態、西京の崇福寺に到着するまでの盛儀、宮中の明堂に安置、観灯の日の武后の舍利の

奉戴、舍利の瑞光の発すること七回あったことなどが記されている。

武后は鳳閣侍郎の崔玄暉（『旧唐書』卷九十一）と法藏に仏舎利の奉迎を命じた。大崇福寺主であった法藏は応大徳、綱律師など十人ともに法門寺舍利塔に行き、七昼夜にわたって行道したという。この記事は『旧唐書』の武后紀にも、崔玄暉伝にも述べられていないし、『資治通鑑』卷二百七、則天后長安四年の条にも記述されていない。『法藏和尚伝』の記事によると、長安四年冬、崔玄暉と法藏など仏僧が法門寺に行き、舍利を奉迎し、十二月三十一日に西京の崇福寺に到着し、翌年正月洛陽に入り、正月十五日、仏舎利奉迎の儀式を行ったことになる。なお崔致遠が記している割注によると、法門寺から洛陽の宮中の明殿に到る経路を推定できる。法門寺から武功県を経て崇福寺に滞在し、崇仁坊の門を経て渭南県の興法寺に宿し、寿安県を経て洛陽の明堂に安置されたのである。

なお法藏とともに法門寺で行道した綱律師とは崇聖寺文綱（『宋高僧伝』卷十四）のことである。文綱伝には、

長安四年、勅を奉じて岐州の無憂王寺に往きて舍利を迎う。景竜二載、中宗孝和皇帝、延いて内道場に入れて行道し、真身舍利を送って無憂王寺に往きて塔に入る。

とあり、文綱が法門寺の舍利を奉迎した事実は明らかであ

る。

法藏の法門寺の舍利奉迎の記事は『法藏和尚伝』にのみ記載されているが、これを傍証する資料はないのであろうか。それは刑部侍郎、先に引用した張或の撰した『聖朝無憂王寺大聖真身宝塔碑銘並序』（『全唐文』卷五百十六、『金石粹編』卷百二）の中にある。これは法門寺の舍利塔についての沿革、歴史を明らかにしたものである。ちなみに法門寺の舍利塔を「大聖真身宝塔」と名づけたのは中宗である。『全唐文』所収の『真身宝塔碑銘并序』には、

則天聖后長安四年、勅大周□□□□□□□□□□公暉同往開之。『金石粹編』も同文

とある。この資料による限り、法藏が法門寺に舍利奉迎に行った事実は欠字の部分があるために不明である。しかるに陳景富氏が収録した『真身宝塔碑銘並序』（陳景富編著『法門寺』附録碑文）では、

勅大周西□□□□法藏鸞台□□□□□□公暉同往開之。

となっており、法藏の名前が明らかに見られる。この碑文の欠字を充填すればつぎの如くなるであろう。

勅大周西園法藏、鸞台園公暉同往開之。

崔玄暉の伝は『旧唐書』卷九十一、列伝第四十一にあるが、崔玄暉は博陵、安平（河北省安平県）の人で長安三年、鸞台侍郎となり、さらに長安四年には鳳閣侍郎、銀青光祿大夫

になった人で、碑文では鸞台侍郎と官名を示したのである。

この『真身宝塔碑』は扶風県にあったが、今はすでに佚しているというが、この碑文が明らかにされたことによって、崔致遠の『法蔵和尚伝』の舍利奉迎の記述の信憑性が確認されたのである。なお崔致遠は入唐し、科挙に合格し（八七四年）承務郎侍御史内供奉に任ぜられた（『三国史記』卷四十六、列伝第六、崔致遠伝）。また『法蔵和尚伝』に自ら記すところによると、咸通十五年（實際は十四年、崔致遠の思い違いか）三月、懿宗皇帝が法門寺の真身舍利を迎えたとき、西京にあって舍利奉迎の盛儀を実際に目撃しており、法蔵の舍利奉迎に思いをはせたにちがいないのである。

以上、法蔵の伝記のなから法門寺舍利塔における煉指と、長安四年の法門寺舍利奉迎に関する閭朝隱の『碑文』、および崔致遠の『法蔵和尚伝』の記事を検討したのであるが、このことからいくつかの問題点が明らかになる。

まず第一には舍利奉迎の記事をのせている唯一の古い資料である『法蔵和尚伝』の記載は事実と認められることである。このことから『法蔵和尚伝』の記録をさらに詳細に検討、法蔵伝のもっとも重要な資料として『碑文』とともに重視する必要がある。

第二には、法蔵と舍利との関連を考えるうえに無視できないのは、経を誦するたびに口中より数百粒の舍利を得た樊玄

智と法蔵との関係である。この点については別に稿を改めて論じてみたい。

第三には従来の法蔵像は、華嚴宗の大成者で、訳経で活躍し大部の著書を書いた学者というイメージが強かったが、それは『宋高僧伝』以後の資料にひきずられて法蔵像をかってに後代の人が創作したからではないか。靈異者としての側面から法蔵像に照明を与える必要がある。

1 小林実玄「華嚴法蔵の事伝について」（『南都仏教』第三十六号、昭和五十一年七月）。吉津宜英「法蔵伝の研究」（駒沢大学仏教学部研究紀要」第三十七号、昭和五十四年三月三十日）。

2 拙稿「法門寺出土仏指舍利考」（藤田宏達博士還暦記念論集『インド哲学と仏教』藤田宏達博士還暦記念論集刊行会、平成元年十一月）。

3 「季羨林先生談扶風法門寺出土的仏教文物」（『法音』一九八七年第五期）。

4 陳景富「關於法門寺歷史的幾個問題」（『人文雜誌』一九八八年第五期）。および同氏著『法門寺』（長安仏教研究叢書、三秦出版社、一九八八年四月）参照。

5 田休光撰「法蔵禪師塔銘并序」（『全唐文』卷三百二十八）
「禪師諱法蔵、緣氏諸葛、蘇州吳興人、……如意元年、大聖天后聞禪師戒行精最、奉制請於東都大福先寺校無尽蔵、長安年、又奉制請校化度寺無尽蔵、其年又奉制請為薦福寺大德……」

△キーワード▽ 法蔵、法門寺、舍利、華嚴

（愛知学院大学教授・文博）